

～「子どもだけど大人」「大人だけど子ども」な人たちへのメッセージ～

L I T T L E B I G

第47号 2011.1.18

発行：福島県立図書館 こどものへや

〒960-8003 福島市森合字西養山1番地

TEL 024-535-3218

kodomo@library.fks.ed.jp

http://www.library.fks.ed.jp

【Pieces - かけらたち - 】本の中の言葉

エドワードが歩を止めてじっと彼の顔を見た。何か皮肉めいた台詞が返ってくるかと思ったら、素直な笑顔が花開いた。人形めいた美貌に温もりがやどり、癪に障る取り澄ました雰囲気もやわらぐ。

束の間心が通じ合った。

『キューピッドの涙盗難事件』（真瀬もと／作 理論社 2007年 p314）

（前略）やがて彼は懷中から、もう一枚の紙切れを取出して机の上に置いた。それは、極く薄い、二寸四方ほどの、小さいもので、細い文字が一面に認めてあった。彼は、この二枚の紙片れを、熱心に比較研究しているようであった。そして、鉛筆を以て、新聞紙の余白に、何か書いては消し、書いては消していた。

「二銭銅貨」（江戸川乱歩／〔作〕 『江戸川乱歩短篇集』所収 岩波書店 2008年 p17）

ニューヨーク市警殺人課に配属されてから足かけ五年になるが、いまもって、いつか、だれかが、わたしの秘密をかぎつけるのではないかと考えるたびに背筋がぞくぞくする—わたしの手がけた難事件の大半は、実はわたしの母が解いたのだという秘密を。

「ママは賭ける」（ジェイムズ・ヤッフエ／〔作〕 『ミステリーはおいしい』所収 ポプラ社 2007年 p33）

「留伊さん！」

「留伊！」

りんとミス・リードは同時に叫び、暖炉の方へ駆け寄ろうとした。

猫女が立ちふさがる。いつのまにか、その手には長い刺身包丁が握られていた。

「馬鹿だねえ、二階の男も、おまえさん達も。こういうところへ来て、ドル銀貨なんぞ見せびらかして、無事に帰れると思ったのかい？」

『港町ヨコハマ異人館の秘密』（山崎洋子／著 あすなろ書房 2010年 p145）

【辞典】

辞典とは、ことばの読み方や意味などが書いてある本のことです。なじみのあるものだと『国語辞典』や『英和辞典』などがありますが、他にもユニークなものがたくさんあります。

例えば「流石」という言葉、みなさん読めますか？素直に読んだら「りゅうせき」ですね。でも、「りゅうせき」で引いても国語辞典には出てきません。そんな時役立つのが『ウソ読みで引ける難読語辞典』（小学館 2006年）。この辞典は読み方が分からないことばでも、「ウソ読み」で引けるのが特徴です。先ほどの「流石」は、正しくは「さすが」と読むのですが、この辞典なら「りゅうせき」で意味が調べられます。「明太子」は「めいたいし」でも引けますし（正しくは「めんたいこ」）、「弥生」は「やせい」で引けます（正しくは「やよい」）。

面白いものとしては、『おいしさの表現辞典』（東京堂出版 2006年）なんてものがあります。この辞典で「厚焼き卵」を引くと、「軽くて淡泊で、柔らかな甘さ…。〔雁屋哲／美味しんぼ 18〕」と出てきます。そう。これは文学作品や新聞記事などの中から「おいしさ」を表現した言葉を集めた辞典なのです。

ユニークなだけに、活用方法も自分次第。みなさんも図書館で手にとってみてはいかがでしょうか？

ナメから本を読む

このコーナーでは、テーマに合わせて本のちょっと変わった読み方をご紹介します。

テーマその⑦

ミステリ★ブック

ミステリ(推理小説)は、犯人が犯罪の発覚を防ぐために仕掛けたトリックを探偵や刑事が鮮やかに解決する—というのが典型的なパターンの小説です。内側から鍵がかかった部屋で死体が見つかる「密室殺人」や、動機(犯罪を犯す理由)はあるのに犯行があった時間には別の場所にいたという証拠がある「アリバイトリック」など、仕掛けられるトリックは様々です。解決のためのヒントは物語の中に出てくるので、自分で推理しながら読むこともできますよ。探偵気分で読んでみてはいかがでしょう。

★ミステリ小説★

ミステリ小説にはこんなものがあります。

書名	著者名	出版社	出版年
『ミステリーはおいしい』 (ミステリーセレクション4)	赤木かん子／編	ポプラ社	2007
『キューピッドの涙盗難事件』	真瀬もと／作	理論社	2007
『オリエント急行の殺人』	アガサ・クリスティー／著	早川書房	2007
『江戸川乱歩短篇集』	千葉俊二／編	岩波書店	2008
『闇の喇叭』	有栖川有栖／作	理論社	2010

☆「悪いこと」って？☆

ミステリ小説の犯人は、「悪いこと」をして捕まります。でも、「悪いこと」ってなんでしょう？誰が「良いこと」と「悪いこと」を決めるんでしょう？また、私たち人間は「悪いこと」にどう対処してきたのでしょうか？

書名	著者名	出版社	出版年
『犯罪と刑罰』	アリソン・ブラウンリー／著	星の環社	2000
『こんにちの犯罪』	アイリス・タイクマン／著	小峰書店	2004
『いいとわるい』(哲学のおやつ)	ブリジット・ラベ、ミシェル・ピュエシュ／著	汐文社	2008

★犯人のその後について考えたことはありますか？★

ミステリ小説では、トリックの謎が解けて犯人が捕まってめでたしめでたし…となることが多いのですが、現実世界ではその後犯人は裁判にかけられ、罰を受けます。裁判はどのように進むのでしょうか？犯人のその後についても考えてみましょう。

書名	著者名	出版社	出版年
『気分はもう、裁判長』	北尾トロ／著	理論社	2005
『「悪いこと」したら、どうなるの？』	藤井誠二／著	理論社	2008

(編集 こどものへや司書・小林)